2022年度　ACL研究プロジェクト　團紀彦

－高取町アートスペース－

研究テーマ:
奈良県高市郡高取町に計画される美術家大久保英治氏のアトリエ建設に伴う敷地周辺環境の調査、及び隣接する高市郡明日香村を含めたエリアの歴史的文脈の調査研究を行う。

研究調査:
青山学院大学総合文化政策学部團紀彦ゼミを中心に下記の三回の研究調査を実施した。
第一回　2022年7月31日～8月1日/アトリエ敷地周辺調査+飛鳥京、藤原京の歴史的文脈調査
第二回　2022年11月12日～13日/アトリエ敷地周辺調査+「宗教戦争」に関するする古代史研究
第三回　2023年3月26日~27日/アトリエ敷地周辺調査+「古代飛鳥と国際関係」に関する古代史研究

第一回研究調査/アトリエ敷地周辺調査

大久保英治氏の家の居間は丘の上から真北を向いているため、北斗七星を象った間伐スペースを竹林の中に設け、そこにアートを展示できるようにしたいと考えます。この村落が重視している槙の木が敷地内にあるためそこを北極星－計画の中心に据えて、木の足元の平場に軽井沢セゾン現代美術館の庭園内に設置してある「胡座茶席」を解体して移設する予定です。この移設は今秋10月下旬を予定していますので、移設完成時に参加できる皆さんはぜひ来てください。先ず7月31日にはこのプランを持って、大久保さんと近隣の皆さんと高取町役場の方達との懇親会に参加する予定です。竹林は大久保さんの敷地外にあり、地元の製薬会社が所有しているため街と地元の方達の賛同とご協力を得なければなりません。竹林の手入れを申し出ることから始めるべきと考えます。どうなるかは分かりません。なぜ北斗七星かというと飛鳥地方のこの場所のすぐそばのキトラ古墳の天井画には北斗七星の図が描かれており、高句麗の徳興里壁画古墳の北斗七星の壁画などと併せて考えると古代のこの地がいかにインターナショナルであったかを想像することができます。ここでは北斗七星と北極星とカシオペア座をモチーフにしながら、「永遠性」を暗示する静謐な星座のイメージではなく、「生きた」竹林に光を入れる七つの間伐の場所を作り、大久保氏のアートワークを展示するスペースに変えたいと考えます。

TAoS通信－２　2022年8月22日報告／7月31日第1回高取アートスペース現地視察及び飛鳥京周辺リサーチ
参加者:内山、福島、吉原+團、澤野(團事務所スタッフ)
7月31日は天候に恵まれ大久保英治氏がこれからアトリエを立ち上げる予定の住居、工房の既存住居等を見てからその裏山の丘周辺の視察を行った。今回は敷地の北にある竹林まで見ることはできなかったが、軽井沢のセゾン現代美術館庭園内の「胡座茶席」の10月中の移設場所の位置を決定した(図⑦)。大久保氏は2024年に徳島県立美術館で個展を開催する予定であるので、茶席につながる裏山に地形を変えずにある種の舞台装置をデザインしてアートワークと一体にアートスペースを考え、それを徳島の展覧会につなげたいと思う。

丘の北側に立つ住居とアトリエ

大久保邸の居間

南側の裏山

セゾン現代美術館庭園内の「胡座茶席」

2020年茶会風景

移設後

「胡座茶席」移設場所の位置決め

南側の裏山/アートスペース予定地①

飛鳥京周辺の歴史的文脈調査

飛鳥板蓋宮跡

天武・持統陵

民宿脇本

橘寺

橘寺人面石

岡寺

民宿吉井

第二回高取町アートスペース古代史研究調査
日程:11月12日～13日参加予定者:杉本真倫(3年/グループ長/幹事)、中島彩陽、山下美帆、山下蓮

テーマ:宗教戦争

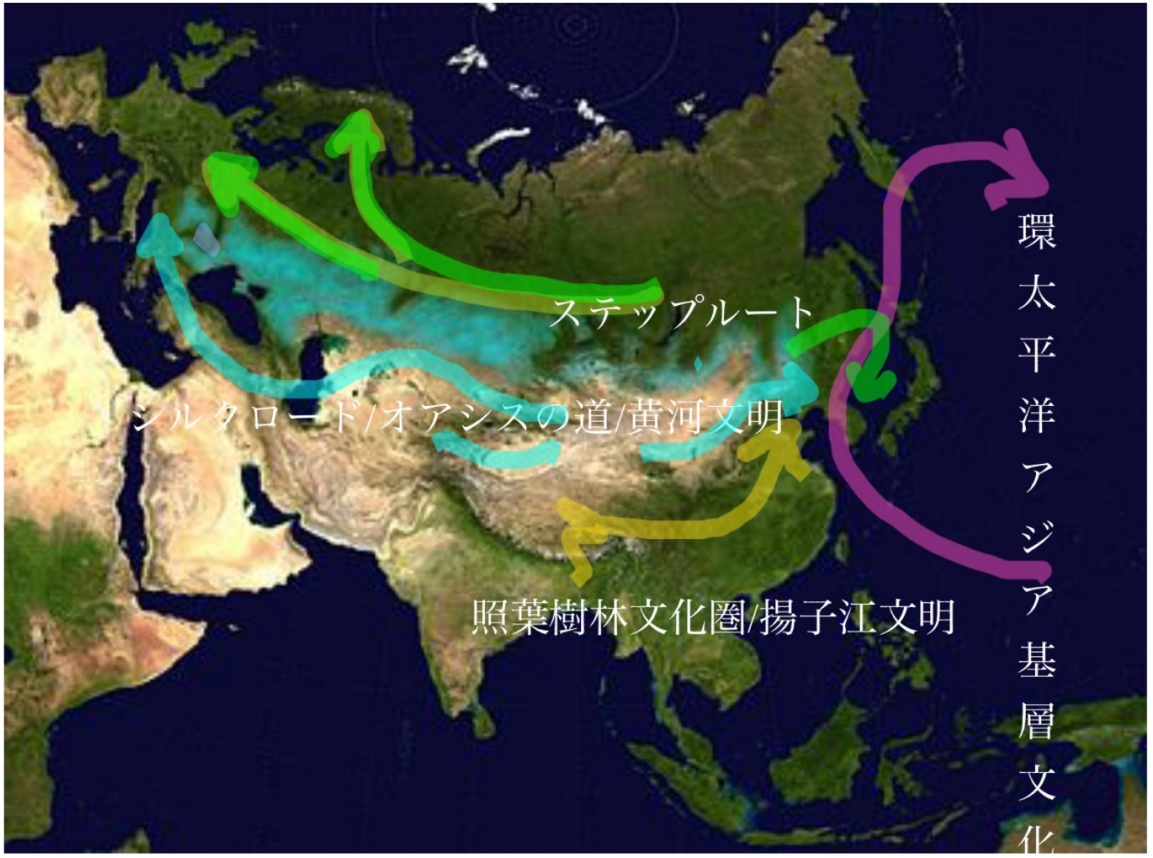
『今回の共通テーマは「宗教戦争」が良いのではないかと思います。日本はいきなり中世の神仏習合のような世界に入ったわけではないのではないかという仮説です。特に587年の丁未(テイビ)の乱から645年の大化の改新迄の60年は、物部氏(排仏派)と蘇我氏(崇仏派)の凄まじい抗争があった時期です。蘇我馬子は聖徳太子とともに物部守屋を誅殺し、更には馬子は崇峻天皇まで殺害しています。大化の改新は滅んでしまった物部の系列だった神道派の中臣氏による崇仏派の蘇我入鹿と蝦夷親子に対するクーデターです。ここまで証拠が揃っていながら何故日本の高校の教科書は宗教戦争のことをクローズアップしないのでしょうか(私の思い違いかもしれませんが)。欽明→敏達→用明→推古→崇峻の各天皇の間にどのような宗教葛藤があったのか。そしてなぜ日本の高校教科書ではその辺をぼかしているのか、とても不思議に思います。大化の改新とは一体何だったのか。私は宗教戦争の一応の決着以外に答えは見つかりません。これも仮説ですが。そして私にとっての三番目の謎は歴代天皇は神道と仏教のいずれを信奉、または支持していたのかということです。それは今日に至るまで不思議に思っているところです。明らかに神道を奉じていたのは天武天皇だと思いますが、それ以外の天皇はどうだったのか、、、、。』
行くまでの間に以下のことを手分けして調べることができれば良い。一度事務所で事前の打ち合わせができれば良いと考える。①欽明朝から大化の改新を経て持統朝位までの歴代天皇の宗教観/古事記・日本書紀②日本史の高校教科書数冊の中の宗教戦争の記述の特徴と差異、つまり宗教対立として記述しているものがあるかどうか。③こうしたテーマで研修に行く場合、どこを訪れるのが良いか。今後第3回以降も今回のようにその都度研修のテーマを決めて、授業の支障にならない範囲で下調べをした上で実行したいと思います。皆さんからのテーマの中で今後設定したいと思うのは「万葉集と飛鳥」、「飛鳥周辺の古代の都市計画」、「奇石群から見る国際都市飛鳥」、「高取アートスペース」etc. などです。その都度皆さん全員とこうしたテーマの掘り下げを共有して進めたいと思います。　　團紀彦

第二回飛鳥研修参考資料①

587年に起きた崇仏派の蘇我氏による神道派の物部守屋殺害の**丁未(テイビ)の乱**から蘇我氏暗殺の645年の**大化の改新**までの60年間の前半は**欽明天皇→敏達天皇→用明天皇→推古天皇→崇峻天皇**の時代にほぼ相当するが、これらの大王(オオキミ)の宗教的立場は如何なるものだったのか。

欽明天皇は百済聖王から仏教伝来を受けたことで初めは蘇我氏に仏教を奨励したがこれが神道系の物部守屋の反発を招く。
敏達天皇は疫病が流行ったことを理由に仏教排除を主張した物部守屋と中臣勝海(中臣鎌足の祖先)の「国神に背いて他神を敬うなど、聞いたことがない」との進言を入れて仏教禁止令を発布し、これが物部守屋による仏教徒襲撃事件に発展するが、やがてこの問題は皇位継承問題にまで発展する。
天然痘で短命に終わった**用明天皇**は**蘇我馬子**に推戴されて即位した天皇だったので敏達天皇とは違って崇仏派であり、これを背景に崇仏派の**蘇我馬子**が排仏派の中臣勝海、用明天皇の対抗馬であり筆頭の皇位継承者であった**穴穂部皇子**などを殺害し、これに危機感を抱いた物部守屋が軍事行動を起こしたことが逆にクーデターとみなされて滅ぼされたのが**丁未の乱**である。用明天皇の次に立ったのは当時東アジアで初めての女帝となった**推古天皇**で**蘇我馬子**の姪でもあり一層蘇我氏の勢力は強まり、用明天皇の第二皇子であり甥でもあった**聖徳太子**の補佐により仏教興隆につながった。しかし推古天皇の弟の**崇峻天皇**はこうした**蘇我馬子**の専横を嫌い、距離を置いたために孤立し、ついには**蘇我馬子**により弑殺される。
それから六十年が経ち、物部氏は没落したが、かつての盟友中臣氏から出た**中臣鎌足**がのちの**天智天皇**となる中大兄皇子と立ち上がって**蘇我入鹿と蝦夷**を倒したクーデターが**大化の改新**である。これを見れば六世紀後半から七世紀半ばにかけて起きた政争は宗教戦争と位置付けるべきものだと思う。もしこれが西洋であれば神道派が勝利したので、神道が国教になっても良さそうなのだが、日本の歴史はそうはならなかった。ここからは憶測になるが、この政争以来、皇室は仏教と神道とは中立的に一定の距離を持つようになったのではないか。そしてそのことが以後の神仏習合に影響を与えたのではないだろうか。以後の天皇については**天武天皇**は明らかな神道派であり、大仏開眼の詔を発した**聖武天皇**は明らかな仏教擁護派ではあったが、それ以外の例を見れば、天皇が神道と仏教の立場を明確化した例はあまり見つからない。この血塗られた抗争から生まれた皇室の中立性が神仏習合の重要な引き金になったと考えることができる。折口信夫の指摘した**異人(マレビト)信仰**、**アニミズム的な神域思想**に加えて**皇室の中立的な姿勢**が「**日本的なるもの**」と神仏習合に見られる**神仏の共生**を産むきっかけとなったのではないか。

第二回飛鳥研修参考資料②



日本の文化的特性

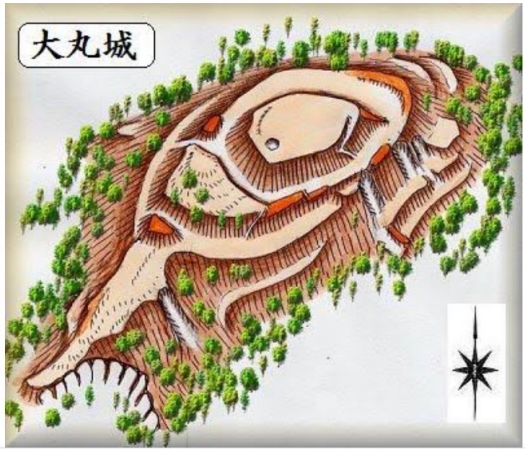
大陸の東端に位置する日本列島はいくつかの異なる文化圏と接していることから、時代はそれぞれ異なるものの多様な文化－南西中国からの稲作農耕を伴う弥生人の流入、朝鮮半島の百済、新羅、高句麗、渤海文化の流入、中華文明と漢民族の流入、ステップルートからの北方騎馬民族の流入、環太平洋アジア基層文化の流入－が起きたことが考えられる。地政学的に見て日本列島はこうした多文化が単に通過するのではなく、また完全に席巻されることもなく、混淆と対立を繰り返しながら発酵していったと理解することができる。人の流入を伴う文化もあれば、情報やモノの移入を主体とする文化もあり、多様な文化の共生のメカニズムを考察する上で貴重なモデルとなる多くの事例を有していると考えることができる。

第二回飛鳥研修参考資料③

土の移動と古代－古墳と稲城と物部氏

物部氏は古代のヤマト王権にとっては重要な権力－内政と軍事－を掌管していた主要豪族であり、その興隆と衰退はほぼ前方後円墳の登場と消滅と軌を一にしていたことから、ヤマト王権の水田開発と墳墓造営の差配及び軍事をも司っていたことが推測できる。水田と軍事を結びつける糸は土の移動ではなかったか。古墳と稲城はこうしてつながるように思う。もし古墳にこうした隠された意味がなければ16万基もの古墳を単なる墓のためだけに造営したとは考えにくいからである。排仏派の物部守屋は大連となり、崇仏派の大臣・蘇我馬子と対立する。物部氏は深く内政に地盤を持っており、今で言えば国土開発大臣兼警察庁長官兼副首相のような立場であったのに対して、蘇我馬子は外務大臣兼副首相と言ったところであろうか。内政と外交は衝突することが多く、かつて現代の日本でも建設大臣経験者の田中角栄元首相が外務大臣を経験した福田赳夫元首相と対立し、角福戦争と呼ばれたことを想起させる。

大仙陵古墳



稲城

第二回飛鳥研修参考資料④

第二陣「宗教戦争」では次のようなことを調べています。この度のテーマは「宗教戦争」で、物部氏と蘇我氏の抗争は一つの主軸になると思われますが、古代にはすでにカルト教団との抗争もあり、聖徳太子の最側近と言われた秦河勝もそのキーマンの一人ではないかと思います。秦氏は日本書紀によれば283年(この年号は少し早すぎるように思いますので要検証ですが)、百済の120県の人を連れて帰化した弓月君を祖としています。秦河勝は京都太秦に弥勒菩薩を本尊として広隆寺を開きました。上記の視覚資料にあるので見てください。「機織り」のハタなどは秦氏がもたらしたとされ、ヤマト王権を支えたさまざまな技術者を伴ったテクノクラート集団ではなかったかと思います。秦河勝は能楽の創始者ともされ、謎に満ちています。この人物は聖徳太子の頃なので6世紀後半の人で、丁未の乱では弓矢に射られて木から落ちた物部守屋の首を斬ったとの伝承があり、明らかな崇仏派だったと考えられます。しかし蘇我氏と違い新羅系仏教を信奉していたとも言われていて、この氏族のその後の消息と飛鳥との関係を調べてほしいことが一つと。常世教という大生部多(オオウベノオオ)を教祖とするイモムシを拝む新興宗教の教団を富士の近くで殲滅したという記録があります。秦氏の出自、弥勒菩薩(釈迦の死後56億7千万年後に出現するメシア)の信仰、丁未の乱と常世教殲滅で示した邪教へのヒステリックな対応、などからこの帰化系の人物の宗教的立ち位置と、半島と大陸から引きずっている宗教観などに興味が湧いてきます。このあたりが二つ目です。515年に北魏で大乗の乱という弥勒下生信仰またはマニ教を背景とした恐ろしい教団の反乱があり、秦河勝の生まれる前だったとはいえ秦氏が多数の人たちを引き連れて倭国に渡来したことと何かの関係があったのかどうか。これが三つ目です。関心のある人に負担のない範囲で調べてもらえると嬉しく思います。仏教と神道の対立と言っても仏教側も一枚岩であったわけではなく、百済系、新羅系、弥勒下生信仰系、マニ教の仮託した偽仏教カルト集団系、もしくはそれに対する反発勢力など様々ではなかったか。現に聖徳太子の仏教の師は慧慈という高句麗僧で、百済聖王から渡来したとされる百済系仏教とどのような関係にあったのか。ことに半島では五胡十六国の乱の後北魏によって統一されていたとはいえ、新羅、高句麗、百済は常に対立状態にあり、そうした海外事情は飛鳥にどのような齟齬を生んでいたのか。

高取町 事後調査レポート(11/12-13 実施)

①4年 山下美帆

1. テーマ 物部連氏の武具が持つ役割
2. 選んだ理由 今回、私が高取町を訪問するにあたって設定したテーマは「物部連氏の武具」である。全体のテーマが「宗教戦争」である中で、特に物部氏を選んだ理由は、奈良県高市郡高取町に隣接し ている明日香村には、大化の改新の始まりにあたる乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮が残存 しており、乙巳の変で滅ぼされた蘇我入鹿と唯一大きな宗教争いを行った物部氏が明日香村近 隣の天理市三島町一帯を納めていたからだ。さらに「武具」を選択した理由は、昨今の国外情勢としてロシアのウクライナ侵攻が突如始ま ったことが影響している。現代の戦争は、銃やミサイルをはじめ、サイバー攻撃、ドローンを 使った無人戦闘機などあらゆる手段で争うが、過去の人々はどのような武器や戦術で勝敗をつ けたのか興味・関心を惹かれたため今回調査に至った。
3. 事前調査内容と関連地 事前調査では、蘇我入鹿と物部氏の宗教争いの原因や背景を調べた。かつて敏達天皇(585 年)のころ、蘇我入鹿は仏教を取り入れ国内に流布させようと腐心していた。そして敏達天皇から 用明天皇へ天皇の称号が受け継がれたことを契機に、用明天皇の許可を得て蘇我氏は仏教信仰 拡大を図った。しかし、同時に疫病が流行し始めたため、伝統的な神祠信仰を良しとする物部 守屋は仏教弾圧の意志を強めた。次第に物部氏と蘇我氏の対立が深まり武力を使った争いに変 化し、丁未の乱へ発展した。一方で近年では、物部守屋も仏教信仰を見据えていたため蘇我入鹿との対立は、宗教争いでは なく、単なる権力争いであったとする説も浮上している。事前調査では、争いの因果関係に関する資料は多数見つけられたが、当時の武具や戦法を示す 資料は殆ど見受けられなかった。実際に物部氏が本拠地としていた布留遺跡や石上神宮に赴き、 古代の戦状況を明確にしたい。<関連地> ・石上神宮(奈良県天理市布留町) ・布留遺跡(奈良県天理市三島町)
4. 調査結果と考察 結論から述べると、布留遺跡に残された武具は祭祀に使われるものであり、武具を戦に用いた という歴史を確認することができなかった。蘇我入鹿と宗教争いを行った人物は物部守屋氏 で、現在の大阪府八尾市西部に拠点を構えており、5世紀ごろ天理市三島町にある布留遺跡一 帯を収めていたのは、物部連氏であった。両者は同じ物部一族ではあったものの、政治への関 わり方は全く異なるものであった。物部連氏は、現在の布留遺跡・石上神宮にてヤマト政権における軍部・警察権を集中して担った。『古事記』によれば布留遺跡近くの石上神宮の祭神 は、フツノミタマという武器神であり、そこには剣一千口という大量の武具が納められていた という。しかし、それら武具が戦に使われたという記録はない。私は、武具を所持していると いう事実が、外敵を寄せ付けない威嚇のような役割を担っていたのではないかと考える。もし くは、武器神に大量の武具を捧げることで布留遺跡一帯に神からの加護を受けようとしていた とも考えられる。今回の調査では、物部連氏が持つ武具は実戦ではないところで意味を持ち、 活用されていた。

②4 年 中島彩陽

1. テーマ なぜ、遷都は奈良で起こったのか、奈良はどうしていくべきか
2. 選んだ理由 飛鳥京をはじめとする、歴史的に重要な箇所を数多くもつ奈良。どうして、京都に移るまでに近い範囲の中で遷都を繰り返していたのか疑問をもった。さらに、京都が発展し、観光 地として脚光を浴びている一方、奈良はもはや遺跡化してしまい、奈良公園が修学旅行の 定番スポットなどとして人気を誇るものの、歴史的に重要な県とは捉えられていない印象 がある。そこで、奈良はどのようにしたら今後地方創生が謳われる日本で輝くことができ るのか考えたいと思った。
3. 事前調査内容 / 関連地 現在の奈良県にあたる地域では、古代頻繁に遷都が行われてきた。その遷都は、明治時代に京都から東京へ京都が移ったのとは異なり、かなり近い距離の間で行われた。また、藤原 京の後には信濃への遷都説があることや、複数都が存在していたという説があるなど、ま だ明らかになっていないことも多々ある。 当然のことながら、当時は都に必要な建築を建造するにも、現在よりも時間や労力が多く かかっていたことが予想される。したがって、遷都の詔が出されてからそこにはタイムラ グが生じていた。その間、都ではどのように政治が執り行われていたのだろうか。　 年 住所現在の様子 跡地跡地跡地・公園南門の復元・公園跡地・公園跡地・公園跡地・神社跡地・公園　飛鳥京(豊浦宮・小墾田 592fc 宮・岡本宮・田中宮)近江京 667 藤原京 694 平城京 710 恭仁京 740 難波京 744 紫香楽宮 744 平城京 745奈良県高市郡明日香村岡滋賀県大津市奈良県橿原市奈良県奈良市京都府木津川市大阪府大阪市滋賀県甲賀市奈良県奈良市
4. 【現地調査後レポート】奈良で巡った都 1 藤原宮2 飛鳥宮3 (平城宮)番外編:天理 1 藤原宮左の図が、飛鳥京以降の都の移り変わりを示した図だ。奈 良県内での移動が中心となっているが、滋賀・京都への遷都も 複数回行われている。また、現在の様子を google maps によ って調査すると、奈良南部・滋賀の宮跡は比較的整備が入って いない印象を受けるが、奈良北部に進むにつれて歴史的名所 として整備されていることが見受けられる。 以上より、廃藩置県の際にどのようにして県境が定められた のか、また、なぜ奈良はかつて栄えたにも関わらず、遺跡化し てしまったのか調査の必要があるといえる。一.現地調査結果報告 2022 年 11 月 12 日撮影 藤原京は奈良県橿原市高殿町に位置する。周囲を大和三山(香久山・畝傍山・耳成山)で囲まれており、周囲に目立った建物はない。写真右には赤い短い柱がいくつも立っている。これ は、大極殿院と朝堂院をつなぐ大極殿院閤門を再現したものだという。この土地から、藤原宮2 飛鳥宮 の規模の大きさを感じることができる。
5. 飛鳥京は奈良県高取町に位置する。こちらも目立った建物はなく、飛鳥の風景は今でも公の力 のよって守られているのだという。遠くでは焼畑と思わしき煙が立っているなど、令和とは思 えない美しい景色が広がっていた。今回訪れた土地には、内郭の北東隅で見つかった建物の柱配置や井戸などを復元したものを見ることができた。
6. 今回奈良へ実際に足を運び、かつての宮があった地をいくつか巡った。また、近鉄奈良線車内 からは平城京を見ることができた。そこで、藤原京には当時汚水が流れ込んできたのでは、と いう話を聞いたりしたことから、遷都の理由は政治的理由に留まらないのではないかと考えた。 高校の日本史の教科書には、通常遷都の理由は記載されていない。遷都の理由にまずは着目し てみる。

二.遷都
飛鳥京
592 年～額田部王女が、飛鳥の豊浦宮で推古天皇として 592 年に即位。これは、この先飛鳥地域に宮が 連続して置かれたことの始まりだった。592 飛鳥豊浦宮629 舒明天皇(場所:不明)630 飛鳥岡本宮637 飛鳥田中宮このように、飛鳥内での遷都がたびたび行われた。637 年の田中宮への遷都は、岡本宮が火災 にあったことにより起こった。P53『古代飛鳥を歩く』千田稔1.遷都の目的603 年に行われた小墾田宮遷都の目的は、唐使の来倭に備えて儀礼空間を整備する必要があっ たことだ。 実際に、推古朝では大殿の庭、庁・調停、南庭という、用途の異なる3つの広場が整備されて いた。そして、外国からの使節に対する儀式は庁・朝廷の空間で行われたという。P562.この土地が選ばれた理由 飛鳥地域には何度も宮が置かれたが、その理由として考えられるものは、 ・飛鳥は渡来人が集中して住んでいた地域で、彼らによって開発された ・渡来人の技術を利用した蘇我氏が、飛鳥に誘致した(蘇我氏の拠点の中心は飛鳥寺だった) という以上の2点だ。近江京 667 年～
1.遷都の目的667 年、天智天皇が近江大津宮へ都を移した。大化の改新の理想に基づいた政治改革を行 うために人心の一新を図るため、また、同盟国であった百済絵の援軍を出して唐・新羅連 合軍と戦った、4 年前の白村江での敗戦後、深刻化した本土侵攻の危機に備え、国土防衛 のための体制を整える中で、天然の要塞であり、交通の要衛でもある大津に遷都したと考 えられている。
http://tendizaidan.jp/publics/index/30/

2.この土地が選ばれた理由 なぜ飛鳥の血を離れた近江の地に宮が遷されたのかということは、不明である。しかし、 同じ頃日本・百済軍は唐・新羅軍に韓国の白村江で大敗している。この出来事を踏まえ、 新羅が日本列島を侵攻するのを恐れ、大津へ離れたという説がある。p93『古代飛鳥を歩く』 千田稔 他には、近江で権力を握っていた息長氏の存在が関与していると考えられる。翁長氏は近 江坂田郡、今の滋賀県米原市の周辺に勢力を持つ豪族だった。彼らは飛鳥の王朝とも関わ りを持っていた。このことは、近江へ宮が置かれたことと関係があるかもしれない。P85 『古代飛鳥を歩く』千田稔藤原京 694～藤原京の造営が具体化するのは、690 年以後のこと。この「藤原京」は喜田貞吉によって初め て使われた言葉であり、『日本書紀』では「新益京」という言葉が代わりに明記されていた。 P150 この京の特徴として、京域が諸説あるという点だ。近年では、東西 927m、南北 906m の宮城が配置され、東西 5.4km、南北 5.3km の正方形の十 条十坊の京域との説が有力視されている。 https://asukamura.jp/files/bunkazai_kiyo_chosya/67.pdf

1.遷都の理由 この頃、日本では朝鮮半島に倣った天皇中心の国家が目指されていた。そこで、朝鮮のような 条坊制をもつ大きな人口都市国家を都市計画によって整備する必要があったと考えられている。 この頃、隋からの使節が訪れていた。その道中、奈良盆地を南北に等間隔に走る上ツ道・中ツ 道・下ツ道の山道を通ったとされている。そこで、彼らに隋の大興城に匹敵する大規模な、建 設中の都城を誇示するという目的もあったと考えられる。他にも、四天王寺の伽藍などをはじ めとする国の象徴を使節に見せていただろう。この頃から、立派な建造物や文化を外交のアイ テムとして活用するという発想は始まっていた。 P29『古代飛鳥を歩く』千田稔 しかし、未だ藤原京の範囲や、真に条坊制が敷かれていたかということは明らかとなっていな い。

2.この土地が選ばれた理由 藤原宮は、風水思想と神仙思想によってその位置が定められたのではないかと考えられている。 「小柴三野王と宮内官大夫らに命じ、新城に遣わしてその地形を視察させ、都を作ろうとされ た」と『日本書紀』11 年 3 月 1 日にあり、地理的条件が風水思想あるいは神仙思想に相応しい か視察させたことを意味する。また、この後の平城京についても、このような記載がある。 ・ 藤原宮の用材が、近江田上山から運ばれてきた『万葉集』巻一の五十番歌)平城京 710~ 平城京の敷地内には現在、近鉄奈良線が走っている。飛鳥から奈良に向かって電車に乗ってい ると、赤と白の歴史的な建物が突如現れた。調べてみると、それは平城京の第一大極院殿大極 門だった。近鉄奈良線が開設された 1914 年当時はまだ平城京の場所は特定されていなかった が、その後跡地が特定され、2000 年に国営化が決定した。
1.遷都の目的教科書:記載なし 元明天皇が律令制に基づいた政治を行う中心地として、それまでの都だった藤原京から遷 都した。唐の長安に倣って、平城京は東西約 4.3 キロメートル、南北約 4.8 キロメートル の長方形の条坊制を持つ都である。
https://www.kkr.mlit.go.jp/asuka/heijo/histry/what.html平城京への遷都は、706 年ほどから議論され始め、翌年 708 年には平城遷都が宣言されて いる。これ以前から、平城京への遷都が検討されていたという説もある。なお、藤原京は 南北側が高く、北西側が低い地形であり、「京域の内外に多く穢臭有り」という記事も見え ることから、王宮内の衛生状態の悪さが遷都の要因となったとの見解もある。 「平城遷都の詔」には、遷都の理由として、「歴代遷都」の観光と立地条件の良さが強調さ れている。『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』仁藤淳

今後調査すべき事項・関西圏の県境の決定方法・隋の都の様子・藤原種継暗殺事件・秦氏の出身地参考資料【書籍】『古代飛鳥を歩く』千田稔『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』仁藤淳【オンライン】https://www.kkr.mlit.go.jp/asuka/heijo/histry/what.html

③3 年 杉本真倫

1.テーマ 秦河勝と東アジアの時代背景について

2.選んだ理由 奈良に都がある時代に、秦河勝が京都に寺院を建立したのはなぜか気になったため。そこで、同氏の出自を探ることに関連して、秦氏と太秦・大秦の関わりについても明らかにしたいと考 えた。また、その生涯を明らかにする上で、渡来人とされる同氏の祖がなぜ日本に来たのか、 当時の大陸で何が起きていたのかについても検討する必要があるため、このテーマを選んだ。

3.事前調査内容 / 関連地 i.秦氏の信仰した弥勒『日本書紀』によると、始皇帝の子孫という伝承をもつ弓月君が、多数の民を率いて渡来し たのが秦氏の始まりとされている。5 世紀より、京都盆地において朝鮮系の人々による開発・ 定住が進み、ここの人々が「秦」姓となったのは 6 世紀以後だった。機織りの技術を伝えたの は秦氏と言われており、広隆寺が建てられた太秦の由来は、秦氏が調・庸の絹をうずたかく盛 り朝廷に献上したことで与えられた禹豆麻佐(うずまさ)の姓からきているとも言われる。秦氏 の歴史的な活動が顕著になったのは、秦河勝という人物からである。彼は、聖徳太子のブレイ ンであり、丁未の乱の際には物部守屋の首を刎ねた人物ともいわれている崇仏派の人物である。 しかし、彼が建立した広隆寺は弥勒菩薩像を本尊としており、蘇我氏と同じ崇仏派ではあるも ()の信仰する仏教の種類は異なったのだ。そもそも、弥勒菩薩への信仰はイラン神話のミスラ神(ミトラともいうが当レポートではミス ラに統一する)への信仰から生まれたとされる。ミスラ神は、インド神話のミトラ神と同じ起源 を持ち、いずれも“契約”を意味する名である。次第に太陽の神、友愛の神としての性格も強め た。また、ゾロアスター教、ユダヤ教に登場するとともに、マニ教、ミトラス教などイラン系 宗教の主神であった。ミスラ神に関連した各信仰について、以下の表にまとめる(事前調査内容 を深掘りするため、表作成だけは研修後に行った)。※成立年・発祥地は最も有力な説を元に記載する。 弥勒信仰 (大乗仏教) 成立年: 紀元前後 発祥地: インドおよ び東アジア　 上生信仰 弥勒は、現在仏である釈迦の次にブッダになることが約束された 菩薩であり、釈迦の入滅 56 億 7000 万年後に世界に現れる未来 仏とされる。それまでは兜率天(仏教の天界の一つであり、内院は将来仏になる者の住処)で修行しているため、そこへ往生しよ うとするのが上生信仰。中国・朝鮮半島・日本で流行した。 下生信仰　弥勒如来の下生(俗世への出現)が今起こるため、それに備える必 要があるとするのが下生信仰。現世の変革を積極的に求める終末 論、救世主待望論的要素が強い。主に中国で流行した。 ゾロアスター教 アフラ・マズダーを絶対神とする一神教。善神と悪神(光明神と成立年:紀元前 6~7 世紀 発祥地:イラン暗黒神)の二元論、終末に救世主が最後の審判を下すとされる終　　末論的世界観が特徴。光(善)の象徴として火を崇めるため拝火教 とも呼ばれる。ここでのミスラ神は、ヤザタ(中級の光明神)を筆 頭する司法の神であり、千の耳と万の目を以て世界を監視する。 絶対神を脅かすほどの威勢があったとされる。　ユダヤ教成立年:紀元前 6~7 世紀 発祥地:イラン　ヤハウェを唯一神とする一神教。タナハ(旧約聖書にあたる書物) が聖典とされる。信仰・教義以上に行動そのものの実践・学究が 重視される。ユダヤ教では、天使メタトロンの起源がミスラ神と いう説がある。小ヤハウェとも呼ばれるほどの実力者であったと ともに、”契約の天使”、”無数の目を持つ”、”太陽のような顔”と いった特徴がゾロアスター教のミスラ神と似ているためだ。　ミトラス教成立年: 1~4 世紀 発祥地:ローマ 太陽神ミスラを主神とする密儀宗教(秘密の宗教儀礼を重んじる ヘレニズム時代の宗教の総称)の一つ。起源や実態については不 明なことが多い。初期は主にローマの下級層に支持され、後期に は宮廷人の入試者も現れた。ほとんどの信者が男性だった。ここ でのミスラ神は聖なる牡牛を屠ったとされる。

ゾロアスター教や ユダヤ教など、古代イランにおける”ミスラ”はイランを守護する 公的な神であったが、ミトラス教の”ミスラ”は神秘的な密儀宗教 の神であり、同じイランのミスラ神が起源だとは考えられないと いう説もある。　マニ教成立年: 3 世紀 発祥地:ペルシャ　ゾロアスター教・ユダヤ教・キリスト教・仏教・ミスラ教を折衷 した宗教。背景にはグノーシス主義の影響もあったとされる。二 元論・無欲・菜食主義が謳われる。ミスラ神の立場はミトラス教 に似ており、創造神・戦闘神としてアフラ・マズラーを凌ぐ立場 にあったとされる。北アフリカ・イベリア半島・中国にかけて広 く信仰された。 日本に仏教が伝来した頃、大陸では様々な宗教が複雑に存在して いたことがわかる。また、 日本では主に仏教の上生信仰のみが広まっていたこともわかった。ii.東アジアの混乱515 年、大陸の北魏では、人を殺すほど教団での位が上がるとされた殺人集団による宗教反乱・大乗の乱が起こった。この背景には、終末論的な要素の強い弥勒下生信仰があったとされ る。同時に、二元論が特徴の極端な考え方をするマニ教が、アジアおよび世界に広がっていた 頃だった。大乗の乱が起こった時期は、ちょうど秦河勝の祖先が日本に渡来してきたとされる 5~6 世紀と一致する。秦河勝の祖先となる渡来人は、大陸での混沌としたミスラ神への信仰か ら逃れ、平和的な上生信仰を新たな地・日本で広めようとしたのではないかと考えられる。実 際、日本で広まったミスラ神関連の宗教は、弥勒信仰の上生信仰のみである。

iii.関連地 広隆寺(秦河勝)、於美阿志神社(東漢氏)

4.考察・気づき 研修の中で、実際に関連地に行くことはできなかったが、團先生や大久保さんご夫婦、天理参考館の方、タクシーの運転手さんから様々なお話を伺うことができた。その中でも、秦氏を はじめとした渡来人についての先生と大久保さんご夫婦のお話が、秦氏や弥勒信仰についての 気づきに繋がったので、以下に私の考察を記す。日本という国はそもそも島国であるため、そこに住まう人々の起源は大陸から渡来してきた 民族であったと想定される。言い換えれば、日本は大陸から逃れた人たちの国なのだ。渡来し てきた理由はともかく、日本に住み始めた人たちには、大陸の侵攻を恐れる精神が根ざしてい ると考えられる。以後、日本に来たいわゆる渡来人たちも、日本では最新の技術を持つものと して崇められたため、自分たちよりも力を持った人々がこれ以上大陸から来てほしくない、と いう精神があったのではないか。これは、今でも日本に根ざしている保守的な国民性の始まり とも考えられる。私たちがこの研修で着目してきた物部氏と蘇我氏についても、この国民性を投影することが できる。日本で古くから重んじられてきた神道を信仰した物部氏は、倭国に昔からいた氏族で あり、外来の仏教に否定的であった。一方で、渡来系の蘇我氏(一説では倭人と言われているが、 蘇我氏の繁栄には渡来人による朝鮮の技術が強く関係しているため、いずれにしても渡来人的 な考えが強かったのではないか)は、仏教の信仰を推進した。結果として、物部氏は衰退の道を 辿ることになってしまったが、日本の地に根ざした渡来人の精神が影響して、歴史が作られて きたことの一例として挙げられる。私のテーマであった秦氏においては、渡来人が大陸から日本に来た具体的な動機と、彼らが 日本で得た精神を見出すことができる。彼らは、多様で過激ともいえる宗教が蔓延した大陸か ら逃れるため、海を渡って日本にやってきた。

渡来先となった場所では、機織りの技術を伝え ており、最新技術を持った渡来人としての役割を果たしている。また、彼らが重んじてきた弥 勒信仰は、広隆寺をはじめとした寺社に継承され、ミスラ神への信仰の中でも上生信仰だけが 日本で唯一広まった。仮定した渡来人の後追いを恐れる精神から、彼らは大陸の過激な信仰が 新たに見つけた未開の地・日本に伝わることを恐れていたと想像できるし、実際に日本への伝 来を上生信仰だけに止めることに成功している。大秦河勝自身もまた、新興宗教であった芋虫 を崇める常世教を殲滅しており、危ない宗教が日本で広まることに対しての危機感が強い氏族 の末裔として、そこに対する正義感は人一倍あったのではないか。以上が、私が今回の研修で得た知見と考察である。秦氏と東アジアとの関係、さらには日本 の抜本的な精神について鮮明にすることができた。ただ、事前調査おいて、朝鮮から来た秦氏 のさらに祖先にあたる人々は、”ユーラシア大陸の奥地”から来たのではないかという説を目に したのだが、その根拠にあたる情報を見つけられなかった。今回、ミスラ神についてより深く調べる中で、”ユーラシア大陸の奥地”であるイランやペルシャと深い繋がりがあることが明ら かになったため、ここに秦氏の祖先との関わりを見出せるのではないかと考えている。これに ついては今後もさらなる調査が必要だ。

④2年 山下蓮

1. テーマ 飛鳥京、藤原京における都市の国際性について
2. 2. 選んだ理由 島国である日本で、村ができ、町がつくられ、都市が形成されていく中で、日本人のルーツはどこにあるのか、また大陸から如何にして人々が日本に渡ったのかとても興味を持った。 事前レポートや高取町での研修を踏まえ、5世紀ごろの日本の都は、様々な外国人が生活する、 国際的な都市であったのではないか、という思いが出てきた。現在日本は、外国人に対して不 寛容な国であるというイメージが強く、しばしばその不寛容さにがっかりしてしまうことがあ る。そのため、古代日本都市の国際関係や、外国人との関係性について調査し、”日本人”とは 何なのか考えたいと思った。
3. 3. 事前調査(要約版) 聖徳太子が「十七条の憲法」を制定した六世紀頃、ヨーロッパでは西ローマ帝国滅亡後の混乱期にあり、民族の大移動が起きていた。西アジアではササン朝ペルシアが、西アジアのエフ タルとの抗争を繰り返している時期で、東アジアでは北魏が東西に分裂し、朝鮮半島では高句 麗・百済・新羅の三国が対抗していた。このような、民族が大移動し、隣国で戦争が起きてい る中で、安全な地を求めて日本に渡来してきた人がいても不思議ではない。 による『聖徳太子の正体』から、聖徳太子がいかに国際人であったかという分析を引用させて いただい。小林氏の見解では、達頭を聖徳太子その人であると分析しており、更に達頭の側近 にはペルシア人やアラブ人がいて、太子は仏教もさりながら、中央及び西アジア文明の影響下 にあった人であるだろうと述べている。また、日本における王権の権威づけの儀礼が、騎馬民 族のそれと共通していることを度々指摘している。しかし、多くの疑問や反論を踏まえる必要 が当然あり、騎馬民族が大移動してきたかどうかについてはさらなる研究が必要である。また、 「騎馬民族は来なかったが、騎馬文化は来た」というフレーズが使われることもあり、馬の存 在しなかった日本列島に、いかにして馬が突然現れたのかということも非常に興味深いところここで、小林恵子 である。 4. 事後調査結果 まず、渡来人の存在を述べていく上で、「韓式系壺」の存在に触れたい。 下に示したのが、天理参考館にて撮影した「韓式系壺」である。
4. 壺に、左斜め上から真ん中にかけて、鳥の足 跡のような模様が描かれていることに注目 していただきたい。このタタキメは「鳥足文 タタキ」と呼ばれている。 この文様をもった土器は朝鮮半島の百 済の地域に分布していることが判明し ていて、百済から渡来した人々の存在を 窺わせる貴重な資料となっている。 また、同じく天理参考館にて、布留遺跡 についても学んだ。布留遺跡は古代の大 豪族、物部氏の拠点集落と考えられてい るが、これまでにも豪族の居館跡と見ら れる石敷や、大型倉庫などが発見されて いる。また、天理市に流れる布留川から 引水するための大溝が5世紀に掘削さ れている。先程示した壺はこの溝から出 土したものである。こうした大型建物の 建設や大溝の掘削には高度な技術を要 したものとみられる。

このほか、鉄刀や 鉄剣などの鉄製品やガラス玉の生産を していたことも判明している。また、布 留遺跡では百済地域以外にも朝鮮半島南部も伽耶地域の土器が出土していて、こうし た作業には先進技術を有した朝鮮半島からの渡来人が深く関わっていたことが推測さ れる。このように、古代の倭国は渡来人の存在によって、大きく発展してきた側面が強いことがよく わかる。次に、5世紀の渡来人で、代表的な集団である「秦氏」と「漢氏」について述べてい きたい。彼らは優れた技術と能力を持ち、日本の国づくりを根底から支えてきた。秦氏は4・ 5世紀ごろに朝鮮半島の新羅からきた弓月君(ゆづきのきみ)を祖とする氏族で、「秦」と書く ように，弓月君は秦の始皇帝の子孫とみることもあるがその根拠はない。土木技術や農業技術 などに長けていた秦氏は、灌漑設備も整えて土地の開墾を進んで行った。また，養蚕，機織， 酒造，金工などももたらした。大和王権(大和朝廷)のもとでは財政担当の役人として仕えて いた。本拠地は始め京都山背にあったが，後に太秦に移り住んだ。中央での活躍と共に，秦氏 の子孫たちは尾張・美濃や備中・筑前に至るまで，全国規模で勢力を伸ばしていった。その後、 農業用水を確保するため，秦氏は桂川(京都嵐山)の水をせき止めて水路に流し込むための堰 (せき)を築造した。京都嵐山にある渡月橋付近の葛野大堰(かどのおおぜき)に現在の姿を みることができる。東漢氏(やまとのあやうじ－倭漢氏)は応神天皇の時代に百済(出身地は 加羅諸国の安羅か)から17県の民とともに渡来して帰化した阿知使主(あちのおみ－阿智王) を祖とする氏族(東漢氏という個人名ではない)。東漢氏は飛鳥の檜前(桧隈:ひのくま－奈良 県高市郡明日香村)に居住して，大和王権(大和朝廷)のもとで文書記録，外交，財政などを担当した。また，製鉄，機織や土器(須恵器:すえき)生産技術などももたらした。 平安時代になると，東漢氏は高祖などの漢の皇帝を祖とするとしていたが事実ではない。秦氏 は秦の始皇帝の子孫としたので，互いに対抗意識をもっていたのかもしれない。こうしてみる と、当時の日本は渡来人を積極的に受け入れ、高度な技術を持った人々として重宝していたの かもしれない。

5. 考察・気づき 高取町や天理市を訪れ、かつての街並みがそのまま残されていることに感動した。また、遺跡や都の跡地を巡りながら、解明されていないことが多く残されていることも実感した。その 中で、渡来人がもたらした技術は大きな鍵になっていると思う。今回、都市の国際性をテーマ にしたが、都市がどれほど国際的であったかはわからない部分が多い。しかし、日本は渡来人 がもたらした技術や思想などに大きな影響を受け、積極的に受け入れてきた背景を知ることが できた。そういった背景を知ることで、現代の日本の外国人に対する思いも変わってくるかも しれない。

⑤2 年 大武まどか

1. テーマ 飛鳥地方に点在する石造物について
2. 2. 選んだ理由 飛鳥地方に点在する石造物は、その数の多さとは対照的に確かな情報が少なく、その存在意義自体や誰が何のために造ったのかということがはっきりとしないなど、謎が多い点が興味深 いと感じたため。また、仏教文化が既に伝来していた 7 世紀ごろに造られたとされる石造物が あるが、これらの石造物は仏教ではない土着の宗教的な意味を持っているのかそれとも別の意 味を持っていたのかなど様々な仮説を考えられる点が面白いと感じたため。
3. 3. 事前調査内容・関連地 1鬼のまな板・雪隠について・元は横穴式石室のそれぞれまな板が底石で、雪隠が石室であった。 2猿石について・1702 年に田んぼの中から発見され、現在の場所へ移設される。・全部で 4 体あり、それぞれ「女」「山王権現」「僧」「男」という名前が付けられている。・「僧」以外の猿石は二面石になっている。 ・「猿石」という名前がついているが、異国人の風貌をしていると捉えることもでき、国外を意識して造られた可能性も考えられる。 ・韓国の済州島のトルハルバンやサイパンにある石垣が猿石と似ていると指摘する人もいる。 3二面石について・高さ 1 メートルほどの石の表と裏に顔が彫られている。・2 つの表情は人間の善悪両面を石に表したものとする説がある。 ・この石が設置されているのは聖徳太子生誕の地とされている橘寺の境内である。
4. 4. 調査結果(現地に行って分かったこと、新たに詳しく調べて分かったこと) 1鬼の雪隠とまな板・7 世紀後半から飛鳥時代の終末期にかけてできた石造物である ・現在のまな板の西にもう一つ別のまな板があったが、明治のころに小さく割られ、庭石に転用された。(割られた石は橿原考古学研究所付属博物館の屋外に展示されている。)・上記の地図からも分かるように、欽明天皇陵から近いため、欽明天皇陵である梅山古墳の 陪塚である可能性も指摘されている。(天理博物館の学芸員さんのお話によると)・6 世紀までは横穴式石槨を造る際は材料となる石を運び、その場で石槨の形になるように加工をしていたが、技術の発展に伴い効率化が進み、6 世紀末から 7 世紀からはあらかじ め部品として底石・蓋石(石室)・扉石の 3 つの部品として加工されたものが古墳を造営 する場所へ運ばれるようになった。・新しい古墳を造ろうと部品を持ってきたまま何らかの理由で造営が中止となりそのまま古 墳の部品のみが放置されてしまったのではないか。 2猿石・4 体ある猿石の内、「僧」と呼ばれる石以外は猿石も二面石である。 ・七世紀の飛鳥時代に制作されたと推定される。・『日本書紀』に記される 620(推古 28)年の欽明天皇陵の大改修の際に、魔除けとして設置された可能性がある。(4 つの石が造られてからどの様に現在の位置まで移動してきたのかについて書かれた資料 によると、猿石の経歴は)・上述の通り 18 世紀に、欽明天皇陵の南側に位置する「池田」の水田から掘り出された。 ...A欽明天皇陵に設置されていたものが田んぼに落下してしまった可能性 ↓・掘り出された猿石は 18 世紀末頃には梅山古墳の前方部南側の墳丘上に置かれ、「掘り出し の山王権現」という在地信仰の意味付けが定着した。...B↓ ・文献資料によると、猿石はもともと梅山古墳の四隅を守るために造られたが、18 世紀以降、顔が猿に似ているという理由で「庚申」と称され、山王信仰が庚申信仰と集合したと 考えられている。↓・江戸幕府は 1864 年 6 月～65 年 2 月に欽明陵の修築(文久の修陵)を実施した。

この修陵では陵墓域への立ち入りが禁じられ、陵墓を地域社会から隔離させることとなる。 具体的な移転先は不明だったが、宮内庁に残る「文久山陵図」から、猿石が梅山古墳南西 の離れた場所に描かれているのを見つけ、古墳周濠の西南方に移転したと考えられる。...C↓ ・在地信仰の対象物と欽明陵の断絶化を図るため、1870 (明治 3)年ごろに吉備姫王墓に移した可能性を指摘。1875 年には吉備姫王墓で在地信仰が継続する猿石の存在に対し、奈良 県も扱いに悩んでいたとみられ、東京の帝室博物館への移転を探っていた。結局は東京移転が実現することはなく、吉備姫王墓内で固定化した。...D

3二面石 ・石の材質や特徴から、上述の吉備姫王墓内に置かれている猿石と同じ場所から運ばれた石である。 ・国外からの来訪者に自分たちの技術力を誇示する目的もあって庭園に飾ったと考えられて いる。(学芸員さんのお話による)〈事前調査には含まれていないが実際に訪れる機会があった石造物〉 4酒舟石遺跡・伝飛鳥板蓋宮跡の東方に位置する小高い丘陵にある。 ・平成四年に丘陵北斜面で砂岩石垣が発見されたことから、『日本書紀』の斉明天皇二年の条で言及されている「宮の東の山に石を累ねて垣とす」「石の山丘」の遺跡と考えられている。 ・平成十二年に行われた発掘調査で新たに亀形石造物、小判型石造物が見つかった。 ・これらの石造物を組み合わせて導水施設を造り出していることが明らかとなった。 ・この遺跡は一つの時代で完成したわけではなく、I期の斉明朝(七世紀中頃)、II期の斉明〜天武朝(七世紀中〜後半)、III期の天武〜文武(七世紀後半〜末)、IV期(九世紀後 半)、V期(九世紀後半〜十世紀初頭)の大きく分けて五つの時期に渡って変遷してきたことが分かっている。 ・四天王寺にも同じ七世紀に造られたとされる亀形の石造物があり、構造やサイズが同じであることが判明した。 ・四天王寺の亀石は古墳時代の石棺に用いられた凝灰岩の「竜山石」で、酒船石遺跡の石材よりも柔らかく、加工しやすいものであった。 ・四天王寺の亀石の方がより忠実に亀を表現していることなどから、こちらの亀石の方が先に完成した可能性がある。 ・韓国にも新羅の代表的庭園「雁鴨池」(七世紀後半)に石の水槽をつなげた庭園があり、 関連を指摘する声がある。

4. 考察・気付き 〈奇石群全体について〉飛鳥地方に点在する石造物群の存在を初めて知った時は、その存在意義などはほぼ同じで日 本国内に限った土着的な意味を持っていると考えていた。また、酒船石遺跡は斉明天皇との関 わりが事前調査の時点で分かっていたが、その他の石造物についてはもっと庶民層の間で信仰 の対象になっているものかと考えていた。しかし、鬼のまな板と雪隠が造営途中だった欽明天 皇の陪塚である可能性や、猿石が魔除けのために欽明天皇陵に設置されていたかもしれないこ と、二面石が国外からの来訪者を意識して造られたものであると考えられていることなどか ら、予想よりも天皇や朝廷など身分の高い人々がこれらの石造物に大きく関わっていることが 分かった。〈2猿石・3二面石について〉 團先生のお話から、メソポタミアにあったカッシート王国には「境界石文化」と呼ばれる石を用いた文化があることを知った。それについて調べるとカッシート時代の典型的美術品が 「クドゥッル」と呼ばれる境界石であることが分かった。境界石とはその名前の通り土地の境 界を示すために用いられ、 ・通常 30 cmから1mほどの頂部が卵型になった細長い石碑。 ・表の面に王から神殿、高官あるいは個人に土地が贈られたことを記す。 ・土地の所有権を侵害すれば神の呪いを受けるであろうと厳しく戒める長文の銘が刻まれているものである。 ・碑面の残りの部分あるいは裏側にはしばしば浮彫が施されている。 ・神々のシンボルが一面に並んでいる。という特徴を持つことが分かった。 これら境界石の特徴に猿石や二面石と類似している部分が多くある。

まずその大きさだが、猿石も二面石も大きさは1m 前後である。更にそのデザインも、境界石と同じ様に表と裏に 彫刻が施されており、人の顔のような模様をしている。またこれらの石造物が置かれていたと 推定されている場所も天皇陵という神聖な場所であり、猿石や二面石はメソポタミアの境界石 と同じようにその境界を示し、その領域の神聖さが侵害されることを防ぐ役割を担っていたの ではないかと考えた。二面石はよく人の善悪の両面を表しているといわれるが、「悪」の部分 が境界石の土地を侵害した際の戒めの部分に対応するとも考えられるかと思った。また猿石は「猿」という名前がついているが、実は異国人の風貌をかたどったものなの ではないかと指摘 する声もあるため、もしそれが本当であり、これらの石造物が境界石の影響を受けて造られた ものであるとするならば、境界石文化がやってきたメソポタミア(現在のイラクの辺り)の 人々の顔を表そうとしたある可能性もある。もしくは二面石や猿石も境界石と同じ様に神々のシンボルを表している可能性も考えられ る。二面石の様に背中合わせになった神が登場する神話や伝説がギリシャ神話(プラトン)、 ペルシャ神話、中国の神異経などユーラシア大陸に広く分布していることも分かったからであ る。このため二面石や猿石に刻まれているデザインは猿でも異国人の顔でもなく、背中合わせ の神々を表したものかもしれない。(メソポタミアの宗教も多神教)多くの共通点が見られる一方で、二面性があることを除けばそのデザインはかなり異なって いるので、どこまでこれらの石造物がメソポタミアの境界石の文化と繋がりがあるのかは不明 である。

〈4斉明天皇とペルシャとの関わりと酒船石遺跡について〉 この遺跡との関わりが深いとされている斉明天皇は、ペルシャとの関係の深さも窺うことが出来る。まずその名前であるが、團先生によれば宝の皇女(タカラノヒメミコ)と呼ばれてい たことから、その出自がトカラ列島の宝島やペルシャのトカラ王国だったのではないかという 説があるということだった。また、朝廷は実際にペルシャの人々と実際に交流があった可能性がある。日本書紀に斉明天 皇の弟の孝徳天皇の時代の 654 年に「吐火羅国(とからのくに)の男二人、女二人、舎衛 (しゃえ)の女一人が日本に漂着した」とある。そして斉明天皇の時代の 657 年にも漢字の 表記は異なるものの、都貨邏人の男女が日本にやってきたとする記述がある。その後の 660 年に日本にやってきたトカラ人の中に「乾豆波斯達阿」(けんづはしだちあ)という名前の人 物がいたとされているが、その人物の名前に含まれている「波斯」というのはペルシャの意味 を持っているので、この人物がペルシャ人である可能性が高い。657 年にやってきたトカラの 人々に対して斉明天皇は須弥山の像を造り、盂蘭盆会を開いて歓迎しており、ただの漂流民に 対する対応とは考えづらいため、日本にやってきているこれらの人々はササン朝ペルシャの王 族なのではないかと考えられる。これらの出来事は史実とも符合している。トカラの人々が日 本に来た最初の記録のある 654 年の3年前の 651 年にササン朝ペルシャはアラブ軍に侵攻さ れて、最後の大王ヤズデゲルド三世の死と共に崩壊した。大王の息子のペーローズは現アフガ ニスタンン北部のトハラ(中国では吐火羅)に逃れ、唐に援軍を要請するなどするも、さほど の戦果は得られなかったという。つまりその滅ぼされたササン朝ペルシャの人々が戦火から逃れるために日本までやってき て、その人々を歓待し、保護した斉明天皇はその際に様々なペルシャの文化を取り込んだので はないかと考える。その天皇が石造物や土木工事を行う際に、全くペルシャ文化の影響を受けなかったと考える 方が不自然ではないだろうか。

今回は訪れる機会が無かった岩船遺跡について松本清張はその 遺跡が日本では「拝火教」とも言われるペルシャで成立したゾロアスター教の拝火壇だったの ではないかという推察もしている。ただこの岩船遺跡については斉明天皇とその娘の間人皇女 との合同の墓が造営途中で放棄されたものなのではないかとする説もある。酒船石遺跡についても酒の醸造用や、天体観測装置、祭祀用などその用途については諸説あ り、祭祀用であれば岩船遺跡と同様にゾロアスター教との関連があるのかもしれない。調べる中でより確実性があるのではないかと感じたのは、「占いのために用いられた」という説である。現在は欠損してしまっているが石を元の形に復元し、地盤沈下などによって逆に なってしまった東側と西側の高低を逆にすると水を循環させることが出来るということが分か った。奈良県橿原考古学研究所の元副所長、河上邦彦さんの説によると、「水はまず C に注がれ、 B が満杯になって初めて A や D1〜6 に至る。D1〜6 から水を容器などで C に戻せば循環させ ることもできる。」ということである。この酒舟石を占いのための道具として用い水を流し循 環させ、その水の流れ方やあるいは水によって流された葉などの行きつく先でこれからの国の 治め方を占っていたのかもしれないと考えた。この酒舟石で占いが行われていたとして、それ はもしかしたら貴族たちの遊び程度であった 可能性もあり、その結果がどこまで本格的に政 治へ採用されたのかは定かではないが、もしかしたら斉明天皇はこの酒舟石を用いて百済派兵 などの重大な決定を下していた可能性もあると思った。

第三回高取町アートスペース古代史研究調査
日程:3月26日～27日 参加予定者:杉本真倫(3年/幹事)、山口紺碧(2年)、大武まどか(2年)、冲永虎太郎(2年)
古代史研究テーマ: 古代飛鳥と国際関係
参考文献/ 日本書紀(下)、万葉集、高松塚被葬者考(小林やす子)、本当は恐ろしい万葉集(小林やす子)
第三回研究調査の位置付け:高取町アートスペースは四棟からなる既存の住宅の再生を行いつつ、すでに昨年末より美術制作を始めている大久保英治氏のアトリエの内部を見学し、飛鳥周辺の史跡の調査を上記のテーマのもとで行なった。

古代飛鳥と国際関係
ここで少し古代の飛鳥・奈良を取り巻く東アジアの国際情勢を見ておきたいと思います。上記は隋に続く唐帝国の勃興と衰退を示しています。唐は7世紀初頭に起こり、10世紀初頭に滅亡するまで、歴代の中国王朝の中で最大の版図を持った国です。大化の改新(645年)→白村江の戦い(663年)→壬申の乱(672年)／天武朝の成立の頃の東アジア情勢が唐の拡張によっていかに逼迫していたかがよくわかると思います。聖徳太子が国交を持った隋は4世紀の五胡十六国の混乱期を制して久々に漢民族王朝を打ち立てましたが、結局は対高句麗戦に失敗し、国力が疲弊して滅亡しました。続く唐は朝鮮半島の百済、高句麗を降し、新羅と同盟を結んだものの新羅により唐の朝鮮半島占領の野心が見破られ、新羅と倭(天武天皇)の同盟による離反を招き、結局は手を引いています。地政学的に見て倭国の頃から常に日本は朝鮮半島を緩衝地帯として中国の侵略を防いできたと理解することができます。

これは今でも続いている地政学だと言えます。ただ古代の東アジアと違う点はアジアから見れば欧米とロシアのファクターが加わったことです。又インターネットの普及で世界をグローバルに同時に見ることができるようになった点です。今世界の経済圏はEUと米国と東アジアに三分されており、EUと米国のパワーが凋落傾向にあるのに対して東アジアが興隆途上にあることは多くの経済学者が指摘しているところです。世界は協調しているとは言え、やはり自国や自分たちの圏域の興隆を願うことはあっても衰退を望む人は少なく、人の不幸は自分の幸せだと考える狭量なナショナリズムが存在することも否定できないことだと思います。日中韓が対立を続け、お互いに牽制しあっている様相は世界平和の視点と圏域内の友好的な交流から見れば好ましくないことは言うまでもありませんが、哀しいかなそれを望む無言の声もあることは認識すべき点だと思います。

中国は殷・周・秦・漢・三国(魏呉蜀)・晋・五胡十六国・北魏・隋・唐・宋・元(モンゴル)・明・清(満州族)・中華民国・中華人民共和国と続く王朝の中で五胡十六国時代と北魏時代は北半の華北だけとはいえ朝鮮系諸族の支配下に置かれ、元はモンゴル族に、清は満州族といった非漢民族に四回も支配された経験を持っています。アヘン戦争以降の英国や、日中戦争における満州における日本を含めれば数回も他国の侵略を受けたことになります。これは日本では起こり得なかったことです。その教訓として常に拡張路線を取っていないと侵略と内乱にさらされる危険性があると認識しているのだと思います。古代飛鳥は今でも生きているということです。次の図は日本では空白の四世紀と呼ばれた古墳時代の中国と朝鮮半島の様子です。

唐の領土の変遷

敦煌探勝 歴史・文学・芸術 敦煌の歴史10 五胡十六国時代 敦煌旅遊集団 ...

唐 - Wikipedia

百済滅亡」！！「古代朝鮮半島の真の友好国」！！ - 自転車屋男 2

山海関 - Wikipedia

五胡十六国時代とは西暦304年から439年の北魏による河北統一までを指す時代区分です。五胡とは匈奴・鮮卑・羯・氐・羌の諸族を指します。匈奴は秦の始皇帝が初めて万里の長城を築いた時に真っ先に排除の対象とした北方騎馬民族で一時は冒頓単于の時に漢の高祖の40万の大群を40万の騎馬隊で囲み、あわや漢が滅亡の危機にさらされたことで史記にも詳述されている部族集団です。鮮卑は朝鮮族系、羯は牧羊を生業とする北西部の騎馬民族、氐はチベット族、羌は中国北西部のチャン族、ミャオ族などの少数民族で、殷王朝の時期に大量の生贄の対象となったとされており、また稲作農耕を日本に伝えた弥生人の祖先ともいわれ、日本人のDNAとの類似性も指摘されています。元々の中華思想とは漢民族を中心に置き北狄、南蛮、西戎、東夷などの異民族を制圧して支配下に置き、朝貢させるというものでした。五胡十六国の時代は漢民族王朝の晋が八王の乱と呼ばれる王家の後継者争いになった時に八人の王子たちが相争う中で、傭兵として騎馬戦術に巧みだった五胡を河北に呼び込んだことから始まりました。これら異民族は次第に華北の覇権を争うようになり、十六国もの異民族王朝を建てて華北を席巻しました。この時代が倭国の古墳時代の空白の四世紀と呼ばれた時代です。漢字を残す漢民族王朝が無くなり、朝貢相手が見出せなかったことが空白の主な理由だったと考えられます。しかしこの古墳時代こそ明治維新以前の日本人の平均身長が最も高かったことや、日本の歴代将軍が「胡座」で描かれていることなどから四世紀に多くの胡人、特に中国東北部や万里の長城の外にいた高身長の北方騎馬民族が海人族の手引きにより渡海して日本列島に入り、交配が進んだものと考えられます。私はこれは多くの戦乱から逃れてきた騎馬民族系の難民がヤマト王権の農耕文化に組み込まれて、古墳造営の労働力になったことによるものだと考えています。これについては「共生の都市学」Ⅲ章「日本文化のアイデンティティー」をご覧ください。

14:57 3月9日(木)
google.com
ストックフォトのシービーシー・フォト
羌族の写真なら、ストックフォトのシービーシー・フォト
表示
関連コンテンツ

在中国历史上曾有一个白种人民族——羯族

知乎 @清酒木桐

上掲の画像は上から①羌族、②~④羯族、⑤匈奴族、⑥~⑦鮮卑族、⑧氐族のもので、五胡と呼ばれたこれらの周辺異民族がいかに東洋人と西洋人の容貌をもつ混成する少数民族の集合体であったかがわかります。また漢字からも漢民族から見れば蔑称であったことが読み取れると思います。またこれらの諸民族に共通する点は半農半牧の騎馬民族系だったことで、移動が早く、西はカスピ海周辺から天山、タクラマカン砂漠、南はチベット高原から東は山東半島、遼東半島から渤海湾、黄海にまで至る広大な領域を往来していたということです。例えば四世紀に華北の大部分を制した石勒は、もとは西晋の奴隷で羯族(けつぞく)の出身だったと言われています。現在のウズベキスタンの首都であるタシケントは石国と呼ばれた国でそのあたりに出自があったと考えられています。彼が西暦319年に建国した後趙は長安、洛陽よりも東の華北の中心地に位置しており、万里の長城の内側にありました。十六国の国名もかつて春秋戦国期からあった漢民族の国名、燕、趙、漢、魏などから取られたものがほとんどで、四世紀の動乱が如何にそれまでの漢民族による異民族弾圧への不満が爆発した結果が五胡十六国の出現に繋がったと考えることが出来ます。日本及び日本人とは何かを考える上でこの空白の四世紀から七世紀の飛鳥時代に至る大陸の状況は重要な意味を持つものだと思います。

五胡十六国時代の地図を見れば明らかなように、秦の始皇帝が築いた万里の長城はもとは匈奴などの北方騎馬民族の侵入を防ぐために作られたものですが、晋末の八王の乱以降漢民族からの内応によって事実上無力化してしまいました。万里の長城はこの時期に最も破られたということです。特に興味深いのはもともと万里の長城の東端部は山海関と呼ばれ、渤海湾で終わっているということです。渤海湾の海に出ればいとも簡単に万里の長城の中と外は往来ができたということです。渤海から黄海に出て済州島を経て南下すれば北九州の玄界灘まではあと少しです。倭国は長城の内外の両方に繋がっていたと見るのが自然だと思います。一度に大量の人が移動するのは内陸でないと不可能ですが、船による渡海は繰り返し渡船を行えば長時間かけて多くの人が移動することが可能です。まして大陸内部と朝鮮半島内部で戦乱が頻発している時期では内陸部ルートは危険を伴います。陸地からのみ人と文明が伝わるという見方からすれば、江上波夫氏の「騎馬民族説」のように北方騎馬民族が内陸を南下して日本列島に侵入して騎馬民族王朝を打ち立てたという説も成り立ちますが、大量の兵が半島内を抜けて、馬を伴って渡海するのは考えにくいのではないかと思います。天皇家に伝わる大嘗祭などは五穀豊穣を願う弥生的かつ農耕的なものであり、騎馬民族的な要素が見当たらないのももう一つの理由です。万里の長城の向こうから多くの人と文物が渡来したことは間違いのないことだと思いますが、渡海のルートが意外にも多かったのではないかと思います。私見を整理すると、日本列島への渡来人の第1期は紀元前1000年頃から弥生人の祖先が雲南方面から揚子江沿いに東へ下り、羌族や比較的低身長の閩越の人たちが稲作農耕と高床式建築物を携えて徐々に渡海して九州方面に渡来して縄文系の先住民と混交していった。これは約1000年続きますが、その後紀元3世紀以降に古墳時代となって、高身長の北方騎馬民族、非稲作農耕民の五胡＋中国東北部の漢民族が戦禍を逃れて難民として渡海して来たのが第2期ではないか。この北方系の渡来民が稲作農耕と古墳造営の労働力となったのではないか。渡海は重要なプロセスで、その担い手は海人族と呼ばれ、馬具、農工具、漁具、武具に必要な鉄の精錬技術を持ち、安曇氏のように豪族化して日本の支配層になった。金属の精錬は西突厥をはじめ北方騎馬民族の特技とも言える技術であったこととも符合する。天武天皇の本来の名は大海人皇子(オオアマノオウジ)で、この海人族を束ねたことを象徴していると言われています。この人物が小林やす子氏の説のように高句麗将淵蓋蘇文その人であったかどうかは判りませんが、国号をあらためて、倭から日本としたことや、初めて天皇を自称したこと。始めての国史日本書紀を発注したこと、自らを初代国王とせずに古代の倭の大王に遡って天皇とし、自身を第四十代の天皇としたこと。などから五胡十六国時代を経て、中華文明に対して自立性を持ちながら唐と対抗しようとした意思が見られることは明らかではないかと思います。

26日の行程(案)

唐招提寺:759年唐僧鑑真を招いて建立された純然たる唐代の様式を持つ律宗の仏教寺院。

法隆寺／中宮寺:聖徳太子により601年に造営された斑鳩宮(いかるがのみや)の西に建立された仏教寺院。斑鳩宮は643年に蘇我入鹿の兵により焼き払われ、聖徳太子の長子、山背大兄皇子をはじめとする上宮王家は滅ぼされた。中宮寺は太子の母穴穂部間人皇女の開基とされ、本尊の半跏思惟像は秦河勝の氏寺京都広隆寺にある弥勒菩薩とともにその美しさが並び称される。

鏡王女(かがみのおおきみ)の墓:飛鳥時代の歌人。初めは天智天皇の妃でのちに藤原鎌足の妻となった。額田王(ぬかたのおおきみ)の姉とも、また同一人物との説があり謎に包まれている。

藤原京跡:藤原京は天武天皇が造営した日本最古の条坊制の都市で、唐ではなくそれより古い中国漢代の都市を手本にして作られたとされる。天武天皇は幼少時に漢皇子(あやのみこ)と呼ばれ、帰化人系の漢人の姓を持つ高向玄理と斉明女帝との間の子であるという説があることから漢代の都城を手本にした可能性がある。藤原京は土地の勾配を無視した排水計画のために遺棄されたとされる。

飛鳥京跡と飛鳥板蓋宮:飛鳥京は日本最古の都市で条坊制を持たず、歴代の倭の大王のヘッドクォーターとしての宮が公園的な緑地の周囲に点在する。一代一宮と呼ばれるこの形式は、大王崩御後に取り壊された可能性が高く、権力の象徴としてのモニュメントを永遠に残そうとした西欧や中国の都市とは異なり、権力もまた「宿る」ものとしての独自の世界観を反映したものと考えられる。飛鳥板蓋宮は皇極天皇の宮として作られ、大化の改新の舞台となった。

高松塚古墳:この古墳は藤原京時代に造営されたもので、被葬者は天武天皇の皇子とされるが諸説あり定まっていない。石室内部の四神図と女子群像は唐文化の影響を受けた高句麗古墳群のものと酷似していることが指摘されている。

キトラ古墳:被葬者は高市皇子などの天武系皇子とされるが定まってはいない。高松塚古墳よりも唐代の影響が少なく、それ以前のものとされる。四神図の他に天井に北斗七星の星座が描かれている。

借史という言葉が妥当かどうかはわかりませんが、異なる地域の始祖伝説に共通のパターンがあることはよく知られていることです。しかし小林ヤス子氏がアケメネス朝ペルシャの始祖キュロス一世の出自の伝承と、新羅本紀と日本書紀の鏡の王女と額田王と天武天皇の関係に共通点を指摘したのは慧眼だと思います。(「本当は恐ろしい万葉集」第一章　額田王は「帰国子女」だった　より)そのような言い回しで伝説化せざるを得なかったということもあったと思います。イエスの生誕、漢の高祖の生誕、モンゴルの始祖伝説にもこうした共通点が見られます。

しばらくは万葉集と小林やす子氏の「本当は恐ろしい万葉集」を照らし合わせて読んでいましたが、余りにも難解であることと、皇族の登場人物の多さとその人間関係の複雑さに途方に暮れるというのが正直なところです。そこで今は一旦、日本書紀(下／井上光貞監訳)に戻り欽明天皇以降をざっと概観しているところです。特に推古、舒明、皇極(＝斉明)、孝徳、斉明、天智、天武、持統の各天皇の条に目を通しています。日本書紀は国号を倭から日本に変更した天武天皇が国史の編纂を命じて720年に完成したとされる日本現存最古の国史です。国号をなぜ倭から日本に変更したのかは私の想像では白村江の敗戦を通じて敗戦したのは天智天皇の倭国であって、天武朝から始まる日本国はそことは一線を画した国であることを示すためであったと考えます。しかし一方では唐と対抗し得る国であることを示すためには、倭国時代からの王統を引き継いだ連綿と続く国であることを示す必要があったために、初めて天皇を自称した自らを初代国王とはせずに、第四十代天皇と位置づけだものが日本書紀であったと考えます。万世一系という思想はこうして日本書紀の成立と共に確立したものだと思います。中国大陸では晋末の八王の乱から五胡十六国の混乱期に入り、300年の混乱の後にようやく漢民族王朝としての隋が581年に、唐が618年に成立していました。唐側の国史でも唐書倭国伝と唐書日本国伝が併記された所以です。天武天皇が川島の皇子以下の12人に日本書紀の編纂を命じ、藤原鎌足の長子藤原不比等(659年~720年)の手を経て天武天皇の第六皇子の舎人親王(676年~735年)により50年後に完成されたことを見れば、日本書紀は天武朝と藤原氏の歴史の正統性を示すものであったことは明らかです。ざっと目を通せば明らかなように日本書紀は多くの部分が朝鮮半島の三国、百済、新羅、高句麗との外交史に割かれていることがわかります。これはこの時期の東アジアが極めて流動的であったことと、倭国から日本国の成立にかけて朝鮮半島との関係が密接な関係にあったことを示すものだと言えます。歴史は都市と同じように細かい断片的な伝承などのディテールの部分と、大きな地形や森や山のように大局的な部分が入り混じっているものです。例えば上述の日本書紀の下巻の286ページの孝徳天皇の条にわずか数行で新羅の使者金春秋のことが書かれています。「容姿がととのい、よく談笑した」と容姿端麗であったことが書紀にしては珍しく付け加えられています。この人物こそのちの新羅の武烈王(603年~661年)で、唐と同盟を結び高句麗と百済を滅ぼした人であり、この時金春秋は新羅と親百済であった倭の関係調整という危険な任務のために来日していたのだと思います。小林やすこ氏によれば金春秋は額田王を妻として娶った人物でもあります。日本では額田王は天智天皇の妹であり、天武天皇妃になり十市の皇女を産んでいるので、金春秋の来日はとても重要な出来事であるはずです。しかしサラッと書かれているためにほとんど見落としてしまうほどです。木を見て森を見ずということが歴史にも都市にも言えることを示す例で、遠くから見れば山が見えても近くによれば山を見失って木が見えてくるということだと思います。

乙巳の変についての記述

十二日、天皇は大極殿にお出ましになり、古人大兄ふるひとのおほえが側に侍った。中臣鎌子連は、蘇我入鹿臣が疑い深い性質で、昼も夜も剣を手放さない事を知って、俳優わざひと（滑稽なしぐさで宮廷につかえる人）を使ってそれを外させようとしたしたところ、入鹿臣いるかのおみは笑って剣をはずし、入りて席に着いた。倉山田麻呂臣くらやまだのまろのおみは進み出て、三韓みつのからひとの上表文を読み上げた。是に中大兄は衛門府ゆけひのつかさに警戒させ、いっせいに十二の通門みかどを閉鎖して往来を止めた。　衛門府ゆけひのつかさの人々を一ヵ所に集め、禄物を賜うように見せかけた。そして、中大兄は自ら長槍を取り、大極殿の傍らに隠れ、中臣鎌子連等が弓矢を持って護衛した。海犬養連勝麻呂あまのいぬかひのむらじかつまろに命じて、箱の中の二つの剣を佐伯連子麻呂さへきのむらじこまろと葛城稚犬養連網田かつらぎのわかいぬかひのむらじあみだに授けて「たちまちにして斬るのだ」と言った。子麻呂等は水をかけた飯を飲み込もうとしたが、恐ろしくて吐いてしまった。中臣鎌子連は元気をだせと叱りつけた。　倉山田麻呂臣は上表文を読み上げるのがまさに終わろうとすると、子麻呂等が（中々）出てこないことを恐れて、流れ出る汗で身を濡らし、声が乱れて足が震えていた。鞍作臣くらつくりのおみは怪しんで、「何故震えているのだ」と聞いた。　山田麻呂は「天皇のおそば近くにおりますことの恐れ多さに、不覚にも汗をかいてしまっています」と答えた。　中大兄は、子麻呂等が入鹿の威勢に畏れて、ぐずぐずして進まないのを見て、「咄嗟やあ」と叫んで、子麻呂等と共に飛び出し、不意を突いて、剣で入鹿の頭と肩を切り裂いた。　入鹿は驚いて立ち上がり、子麻呂も剣を振るって片足を傷つけた。入鹿は転がる様にして御座にすがりついて、請い願って言った、「まさに皇位にあられるべきお方は天あめの御子でございます。私は何の罪を犯したのでしょうか。どうかはっきりと教えて下さいませ」　天皇は大いに驚かれ、中大兄に詔みことのりして、「このような事は知りません、何故この様な事をしたのですか」とお尋ねになった。　中大兄は地に伏して、「鞍作くらつくりは皇統を滅ほろぼし、まさに皇位を絶とうとしています。鞍作の為に天孫が滅びるということがあってよいのでしょうか」〈蘇我臣入鹿のまたの名は鞍作という。〉　天皇は直ちに席をお立ちになり宮殿の中にお入りになった。佐伯連子麻呂さへきのむらじこまろ、稚犬養連網田わかいぬかひのむらじあみだは入鹿臣を斬った。是の日、雨が降り、俄かにほどばしり溢れた水が庭に流れた。席障子むしろしとみ（蓆を使った屏風の類か？）で鞍作の屍かばねを覆った。古人大兄ふるひとおひねはこのありさまを見て、自分の宮に走り帰り、人に語って言った、「韓人が鞍作臣くらつくりのおみを殺した。私は心が痛む」そのまま寝室に入って門を閉ざして出ようとしなかった。

中大兄はすぐに法興寺に入り、砦として備えた。凡そ諸皇子もろもろのみこたち、諸王おほきみたち、諸卿大夫まへつきみたち、臣連おみむらじ、伴造國造とものみやつこくにのみやつこ、ことごとくが従った。（中大兄は）人を遣わして鞍作臣が屍を大臣蝦夷に賜わった。　是に漢直あやのあたひは一族たちを皆集め、鎧を着て、武器を取って、大臣を助けて陣を張った。中大兄は將軍いくさのきみ巨勢徳陀臣こせのとくたのおみを遣わして、天地開闢以来、始めから君臣が別にあることを賊党に説き、その進むべき道を言った。これで高向臣國押たかむくのおみくにおしは漢直あやのあたひ等に語って言った、「吾等は君大郎きみたらう（入鹿様）のことで殺されるだろう、（蝦夷）大臣もまた、今日明日のうちにたちどころにその罪で討たれてしまうだろう。ならば誰の為に虚しく戦って、ことごとく罰せられてしまうのか」と言い終わると、剣を外し、弓を放り出して去ってしまった。賊徒もまた散り散りに逃走した。13日、蘇我臣蝦夷達は誅殺されるにあたり、ことごとく天皇記すめらみことのみふみ、國記くにつふみ、珍寶たからものを焼いた。船史惠尺ふなのふひとゑさかは素早く焼かれる國記を取って、中大兄にたてまった。是の日、蘇我臣蝦夷と鞍作（入鹿）の屍を墓に葬ることを許し、また、哭泣ねつかい（喪にあたって悲しむ）することを許す。是の日、或人の第一の謠歌わざうたを説明して言った。　其の歌の、「遥々ハロバロニ、琴ゾ聞コユル、島ノ藪原」と言うのは、宮殿みやを嶋大臣しまのおほおみの家と隣り合わせに建てて、中大兄と中臣鎌子連が密に重大な計画を立て、入鹿を殺そうとした前兆である。　第二の謠歌わざうたを説明して言った、其の歌の「彼方ヲチカタノ、粟野ノ雉キギシ、不響トモヨサズ、我ハ寝カシド、人ソ響トヨモス」と言うのは、上宮かむつのみやの王たちが、すなおな性格のため、罪も無いのに、入鹿に殺され、自分では報復しなかったけれど、天が人をして誅する前兆である。　第三の謠歌を説明して言った、其の歌の「小林ニ、我ヲ引キ入レテ、爲セシ人ノ、面不知オモテシラズ、家不知イヘモシラズモ」と言うのは、入鹿臣が突然宮中で、佐伯連子麻呂、稚犬養連網田のために斬られる前兆である。

「大化の改新」とは何だったのか？上記は日本書紀の皇極天皇の条の蘇我入鹿暗殺の場面の記述です。かなりリアルに描写されており生々しさが伝わってきますが、重要な政変とは言え単なるクーデターであれば何故これ程まで強調されなければならなかったのか、少し疑問に思います。645年前後の関連する出来事を時系列で並べてみますと。

538年　仏教公伝/蘇我氏を窓口として百済聖王から欽明天皇へ
587年　丁未(ていび)の乱/神道派の物部守屋が崇仏派の蘇我馬子・聖徳太子により誅殺される。
601年　聖徳太子により斑鳩宮が造営され
607年に法隆寺中宮寺などの若草伽藍群が建立される。
643年　蘇我入鹿により斑鳩宮が焼き払われ、太子の長子山背大兄王が誅殺される。
645年　大化の改新
646年　金春秋来日/その後人質として倭国に止め高向玄理を新羅に派遣
660年　百済滅亡/唐新羅連合軍により
661年　金春秋(新羅武烈王)没661年　斉明天皇没
663年　白村江の戦い/天智天皇による百済再興が唐新羅連合軍により鎮圧
668年　近江大津宮にて天智天皇即位
672年　壬申の乱/ 天武天皇即位/天智天皇没、大友皇子没
686年　天武天皇没
720年　日本書紀完成

大化の改新は以下のような３つの視点から見ることができるように思います。
①宗教戦争
蘇我氏は欽明天皇の時に百済聖王からの仏教公伝の窓口となり、やがて物部氏を中心とする古くからの神道派と対立するようになり、丁未の乱の時に蘇我馬子により、物部守谷が殺される。以後仏教は盛んになったが、中臣氏のように神道を司った氏族は消滅したわけではなく、逼塞していた。やはりあくまで外来の新興宗教として急速に発展した仏教とは言えそれまでに広く定着していた土俗的な宗教としての神道を完全に駆逐するには至らなかったのではないか。丁未の乱から60年の歳月が流れ、それまで静かにしていた中臣氏が中大兄皇子と組んで崇仏派の蘇我氏を排除した反仏教クーデターと見る。しかしその結果天武朝では伊勢神宮などを皇室の管理下においたとは言え、仏教もまたすでに広がっていたためにのちの聖武朝の大仏開眼などの仏教興隆につながった。その後神道と仏教は神仏習合の共存の道へ進んでいく。

②蘇我氏の専横に対する反発
聖徳太子一族の上宮王家に対して斑鳩宮の焼き討ちと、太子の長子で皇位継承権のある山背大兄王を弑殺するなど蘇我入鹿による権力闘争のための目に余る専横が反発を招いた。皇極天皇の中大兄皇子に対する叱責はあったものの奥に引き込むなどしてクーデターを起こした中大兄皇子と中臣鎌足を直ちに反逆者として捕縛することはしなかった。また蘇我入鹿の臣下達も蘇我氏のために反撃に出ることも無かったのは内部の人心まで失っていたからではないか。第二の謡歌が示すように上宮王家への暴虐が民心を失うきっかけになった可能性が高いように思う。

③蘇我氏が外交戦紛争に巻き込まれたため。
百済皇子の翹岐や豊璋らを蘇我氏が独占的に受け入れた結果、半島内の百済、新羅、高句麗の国家間対立や、一国であっても王族の後継争いなど様々な抗争の火種を抱え込むことになったこともその原因に数えられるのではないか。目の前で入鹿暗殺をみた倭国の皇位継承権一位にいた古人大兄王子の第一声が「韓人(からひと)鞍作臣(くらつくりのおみ/蘇我入鹿のこと)を殺しつ。」だったことから三韓の使者の揉め事がクーデターに発展したと見る向きやさまざまな解釈がこの発言になされてきたが、中大兄皇子を百済皇子翹岐とする小林やす子氏の解釈のほうが筋が通るように思う。

結局、蘇我氏というのは何であったのか。半島、特に百済からの文物や人の窓口であったという意味で、当初は外務省のような役割を果たしていたのだと思います。そしてその先進的な情報力と人材によって倭国を支配し始めた。しかし次第に百済の大使館の様な出先機関としての様相を帯びる様になってきたということではないか。特に半島での三国－高句麗、百済、新羅間の抗争が激しさを増し、しかも東アジアにおける唐のプレゼンスが増す中で、百済が660年に、高句麗が668年に滅亡するに至って、百済王室と倭国の王室が余りにも密接な関係にあったことが、かえって倭国の危機を招くことがわかってきたということではないか。倭国が百済滅亡と心中するわけにはいかないと。斉明天皇から天智天皇にかけての白村江の戦いは、すでに滅亡した百済再興を期するものでしたが結局は倭国は百済の要望を受けて百済系の倭国という立場で介入してしまった。そして敗戦に至ったにもかかわらず、中大兄皇子はようやく天智天皇として大化の改新から23年も経って即位するのです。何故大化の改新の直後に天皇にならなかったのか。もし中大兄皇子が百済王室の翹岐だったとすれば、危機的な状況になりつつあった百済救援に奔走していたからではないか。だから天智天皇の近江朝は百済の亡命政府の色彩が強かったのではないかと思います。一方聖徳太子の上宮王家は高句麗と密接な関係にあり、聖徳太子の仏教の師は慧慈という高句麗僧でした。小林やす子氏によれば聖徳太子は北魏人の母と西突厥の王族の父の間に生まれた渡来人でそのために数か国語を堪能に話すことができ、一度に十人の人たちと話すことができたとの伝承が残ったとされています。敬虔なる仏教徒というのは後に仏教徒が作り上げた虚像ではないか。実際にはゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、ユダヤ教なども携えて来日していたのではないかと思います。この様な上宮王家の国際性は国際性を独占しようとしていた蘇我氏から見れば都合の悪い存在であり、このために大化の改新の直前に蘇我入鹿の兵により滅亡に追い込まれたのだと思います。一つの国の指導層が他国と強い繋がりを持つことは一時はその知識を背景に実権を掌握することができても、結局はそうした国際紛争を倭国に持ち込むことになるというのが、天武天皇の得た教訓ではなかったかと思います。壬申の乱とはそうした海外勢力の入植地としての倭国から独立した日本を目指したものではなかったか。古代飛鳥はそうした国際関係の葛藤の場だったのです。仏教も、高句麗系、百済系と朝鮮半島を経由してもたらされましたが、8世紀になるとインドから中国に伝来した仏教を直接日本にもたらそうという動きが高まり、752年の聖武朝の大仏開眼や759年の唐僧鑑真を招いての唐招提寺の建立に繋がっていくのだと思います。現代の国際社会の葛藤もまた国境を超えたグローバリズムと固有の文化を重視するナショナリズムの葛藤であることに変わりはなく、古代の地政学から学ぶことは大きいと思います。

いま下記の本を読んでおり、とても参考になりますのでお勧めします。「大化の改新の黒幕」－それは中大兄皇子でも中臣鎌足でもない－首謀者は二人いた！
その本にも言及されていますが、ササン朝ペルシャを調べてみてください。そこに出てくる西突厥の首長室点蜜(イステミ)と言う人物がおり小林やす子氏の見解ではその子の達頭可汗(タルドゥ・カガン)が聖徳太子であるとしています。以下に室点蜜についてお送りします。この度聖徳太子の作った斑鳩宮に行きますので参考になると思います。

室点蜜突厥部の大葉護である吐務の次男として生まれる（長男は伊利可汗）。558年、室点蜜は彼の同盟者であり娘婿でもあるサーサーン朝の君主（シャーハンシャー）ホスロー1世と協同で、エフタルを攻撃し徹底的な打撃を与えた。これによって室点蜜はエフタル領であるシャシュ（石国）・フェルガナ（破洛那国）・サマルカンド（Tamir-qapiγ、康国）・キシュ（史国）を占領した。さらにこの頃、室点蜜はアヴァールを駆逐し、アランの地に追いやった。567年頃までに室点蜜はエフタルを滅ぼし、残りのブハラ（安国）・ウラチューブ（曹国）・マイマルグ（米国）・クーシャーニイク（何国）・カリズム（火尋国）・ベティク（戊地国）を占領した。この頃、室点蜜はサーサーン朝にソグド人使節団を派遣し、絹を売る許可を要求した。しかし、ホスロー1世はこれを拒否し、使者を毒殺したため、室点蜜はこれに怒り、突厥とサーサーン朝の関係は悪化した。568年、室点蜜は東ローマ帝国にソグド人首領マニアクの使節団を派遣し、エフタル攻滅の報告と、絹貿易の盟約をかわした。その使節団の帰路に東ローマ帝国のゼマルコス使節団が同行し、突厥の領土を見聞した。575年末、室点蜜は使者のアナンカステスを東ローマ帝国へ送ったが、その直後に亡くなり、東ローマ帝国からウァレンティヌスの率いる使節団が来た時には彼の葬儀が行われていた。室点蜜の死後、子の玷厥（てんけつ）が継いで、達頭可汗（タルドゥ・カガン）となった。

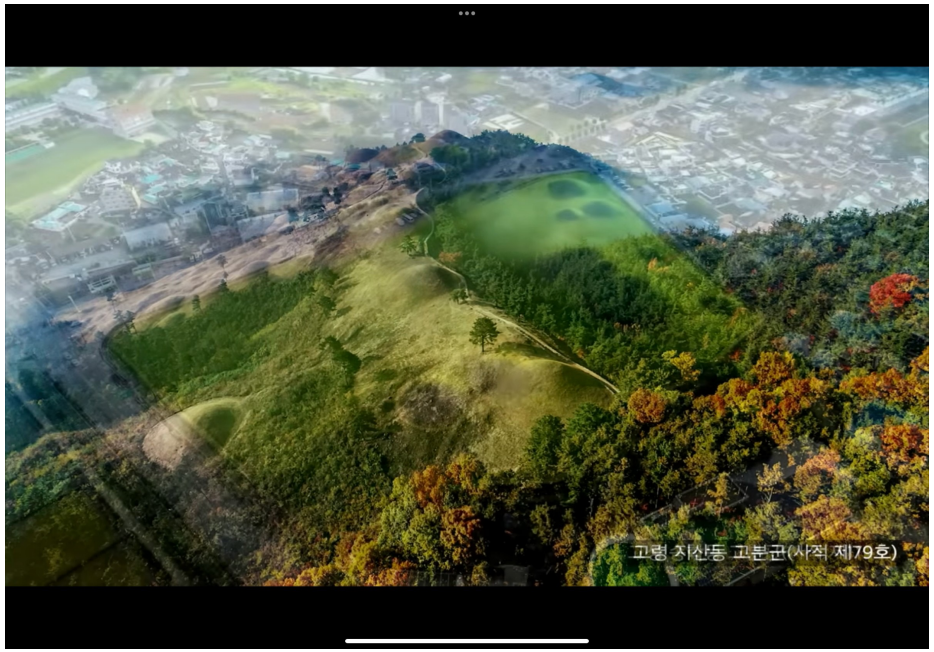
今回第三回の研修のテーマは－古代飛鳥と国際関係－で、第一回の高取町アートスペース、第二回の－古代の宗教戦争－で取り上げなかった、万葉集と飛鳥、飛鳥時代の国際関係に焦点を当て、歴史家の小林やす子氏の著述を中心に準備を進めてきました。今回訪れる場所はそうしたテーマに沿った場所を選んでいます。推薦した図書を全て読む必要はありませんが、私なりに解釈した要約として本LINEのコメントに目を通していただけると幸いです。

そもそもなぜ私のような都市デザインを専門とする者がこうした古代史に強い関心を持ち、皆さんにこうした研修の機会を設けることになったかは少し説明しなければなりません。都市学は先ず都市をどのように認識するかということから始められる分野であり視点だと考えます。その際に先ず空間と時間の双方で我々が持っているバイアスを解く必要があるのです。都市を見ようとするときに、様々な点の集合であるところから都市の文脈を見出すことが大切であるのと同じように、都市の時間もまた、多くの断片の集積であり、それを紐解くことが大切な視点となります。歴史も同じことで、空に浮かぶ無数の星の間の脈絡から星座を見出すことと似ている点で同じことだと考えるからです。一つの場所のアイデンティティーを理解するということは都市も歴史も変わらない想像力と洞察力を必要とすると思っています。日本文化のアイデンティティーを空間的、時間的に理解する上で、飛鳥は格好の対象であると考えます。先ず日本古代史の文献として記紀(きぎ)と呼ばれる古事記、日本書紀は重要な文献だと言えます。古事記はどちらかと言えば神話的な世界に重点を置き、日本書紀はヤマト王権の正式な国史として天皇家の皇統の正統性に力が注がれています。しかし日本書紀が編纂された720年には大化改新や壬申の乱などの古代の動乱からさほど月日が経っていなかったために関係者の子孫も多く、どうしても改竄と隠蔽が行われたことは念頭におく必要があります。私見では二つの点でこの改竄と隠蔽が行われたのではないかと思います。Ⅰ　ひとつは万世一系という天武天皇の理念のもとに、王統に幾つもの不連続や断絶があったにもかかわらず、それを連続した皇統に無理に見せようとした点。Ⅱ　二つ目は一国の正史として対外関係、特に外国の圧力や対外戦争への加担、などを極力抹消した点にあると考えます。倭から日本に国号を変更した天武朝が発注した日本書紀が、倭国から連続する皇統があったとする主張をしていることが、もっともこのことを示していると言えます。中国を例にとれば、周から秦、あるいは秦から漢に王統が変わった場合は例外なく、国史も新王朝から書き換えられるのが通例です。またⅡについて言えば、唐、高句麗、新羅、百済の王家と倭王権とのつながりや、東アジアあるいはユーラシアの騒乱から来る征服、被征服、王家の他国への従軍などは国内の歴史として隠蔽されています。桓武天皇の第一子、安殿親王(後の平城天皇)が唐と吐蕃の戦いに唐の要請により従軍した記録は国史としての続日本紀からは完全に削除されていることが知られています。このように歴史をどのように認識するかについてはその歴史観が依拠する歴史書にどのようなバイアスがかかっているかを知ることが大切だということです。このように時間と空間の関係性を紐解く都市学においては古代史もまた、重要な研究対象に入ると考えます。　　團紀彦

小林やす子氏の歴史観の最大の特徴は日本古代史をユーラシア、東アジアの歴史として読み解いている点です。一方日本書紀などの国史は倭と日本国一国内の歴史としてまとめています。従って倭国の孝徳天皇が百済慈義王と同一人物であり、高句麗王も兼務していた人物であり、三カ国を支配していた王であるという視点は出てくるはずもなく、仮にそのことが当時は周知であったとしてもあくまでも倭国の大王として記述されているわけです。まして高校で教わる日本史もまた、日本一国の歴史としてみているので、東アジア史としては書かれていないのです。この様な一国の枠の中で記述された国史というバイアスの盲点をついているのが小林氏の歴史観だと言えます。それでは本当にその様なことがあったのかという点については、それぞれの関連する国々の国史、例えば朝鮮半島の三国史記や唐書倭国伝や唐書日本国伝、ササン朝ペルシャ史、ローマ史、突厥史などを丹念に比較検討しなければなりません。それだけではなく、英国のようにケルト人がいた場所にローマ人が侵攻し、その後ゲルマン系アングロサクソン人が占領し、その後ノルマン人に征服され、プランタジネット朝のヘンリー二世のようにフランス王がイングランド王を兼務したような複雑な歴史を辿った国の歴史を調べる必要もあると思います。何れにしても世界史の中には現在の一国の中に収まりきれない歴史を持つ国は多数あり、日本だけが例外であったはずはないと考えるのが妥当ではないかと思います。日本は米国のような多民族国家ではありませんが、単一民族国家と言い切れるのかどうかは疑問であり、それは多元的な民族の諸文化が複雑に交わりながら醸成されてきた国ではないかと思います。都市観も歴史観もそれぞれのエリアで多くの伝承やバイアスによって成り立っていて、それはそれで尊重されなければなりませんが、科学的な対象として過去を正しく認識し、未来のあり方を考えようとするのであれば、こうした広い視点に立つ必要があると考えます。今日、ゲノムの解析が進み、考古学と歴史学が大きく変わろうとしています。古代飛鳥がどのような場所であったのかもいずれ大きくその歴史観が塗り替えられる日も来るのではないかと思います。

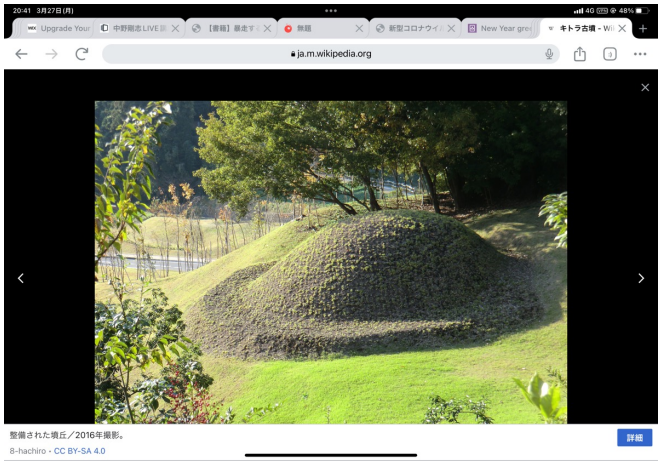
皆さん、一日は晴れ間が出て良かったですね。私達も一緒にあすか周辺を見ることができて楽しかったです。私自身は高松塚古墳とキトラ古墳の周辺のランドスケープとの取り合いと造形に感動しました。今は小林やす子氏の「高松塚被葬者考」を今読んでいるところです。天智朝から壬申の乱を経て天武朝に至る複雑な過程が少しづつわかり始めているところです。

古墳に関しては一応の整理をしてみますと、大仙陵古墳にみられる初期の古代古墳が造営されたのは、おそらく四~五世紀で、中国と朝鮮半島の影響がそれほどみられなかった頃ではないかと考えます。形式はほとんどが前方後円墳で海の近くの平地に造営されていました。高松塚古墳、キトラ古墳は七世紀末から八世紀初頭の大化の薄葬令以降の最晩期に属するもので山裾や尾根に設けられていて、山に造られた加耶の王陵に似ている点が興味深いと思いました。伽耶は日本書紀では任那と呼ばれた朝鮮半島南部の地域で、東の新羅と西の百済に挟まれた十カ国に分立した小国群で、やがて半島の政争の中で六世紀に滅んでいます。六~七世紀にこの半島の抗争と唐の侵攻は倭国をも巻き込む東アジアの国際紛争へと発展していったのではないかと思います。聖徳太子から天武天皇に至る百年余りは従って我々が考えていた以上に親百済の蘇我氏、中大兄皇子、親新羅、親高句麗、反唐の大海人皇子、斉明天皇、中臣鎌足？たちがこの国際紛争に内応しつつ権力闘争を繰り広げていたのではないかと思います。



伽耶(左)と新羅(右)の山陵式王陵

高松塚古墳



キトラ古墳

鏡の王女山陵古墳郡

天武・持統山陵

斑鳩宮跡と法隆寺

唐招提寺